

## 研究領域（V）教育課題

### 第11分科会 社会形成能力

#### 研究課題 社会形成能力を育む教育の推進

#### 視点

① グローバル社会に貢献する資質・能力・態度を育成する教育活動（国際理解教育・情報教育・外国語教育など）の推進

提案者 狭山市立狭山台小学校長 中島敏也

## 1 はじめに

在外教育施設は、その特質から、日本と同等の教育を在外の地で行うとともに、世界で活躍するグローバル人材の育成を期待されている。情報化や国際化が進んだ現在、日本国内の学校でもグローバル人材の育成は重要課題の一つである。私は、平成27年度から29年度の3年間、バンコク日本人学校に勤務した。以下、バンコク日本人学校の教育活動の概要を紹介する。



## 2 バンコク日本人学校の沿革



大正15年（1926年）

盤谷日本尋常小学校として設立

昭和31年（1956年）

大使館附属日本語講習会として再発足

昭和49年（1974年）

「泰日協会」を設置者として、タイ国学校法に基づく私立学校として認可

平成27年（2015年）

創立60周年をむかえる。

平成29年度 在籍数2,696名

（平成29年4月20日現在）

## 3 バンコク日本人学校のステータス

日本国内の小中学校と同等の教育を提供することを目的として設立され、文科省在外教育施設認定校としては、バンコク日本人学校、タイの私立学校としては、泰日協会学校という二重の性格を持つ学校である。

## 4 児童生徒数（世界最大規模の日本人学校）

|     | 学年 | 学級数  | 在籍数 |
|-----|----|------|-----|
| 小学部 | 1  | 14   | 425 |
|     | 2  | 12   | 416 |
|     | 3  | 12   | 405 |
|     | 4  | 10   | 322 |
|     | 5  | 10   | 314 |
|     | 6  | 10   | 296 |
|     | 特  | 3    | 16  |
| 計   | 71 | 2194 |     |

|     | 学年 | 学級数 | 在籍数 |
|-----|----|-----|-----|
| 中学部 | 1  | 6   | 182 |
|     | 2  | 6   | 172 |
|     | 3  | 4   | 148 |
|     | 計  | 16  | 502 |

児童生徒数合計  
2696名  
（平成29年4月20日）

## 5 教職員

平成29年度 職員数 218名

教職員 147名 タイ語教員 7名

英会話教員 10名 水泳コーチ 4名

看護師 3名 事務職員 13名

タイスタッフ（用務員）34名



## 6 バンコク日本人学校の教育

【校訓】明るく なかよく たくましく

【教育目標】（目指す児童生徒像）

豊かな広い心をもった子どもを育成する。

(1) 思いやりのある子 (徳育)

(2) 創造性を発揮し、積極的に学ぶ子 (知育)

(3) 心身の健康をつくる子 (健康)

(4) 国際性豊かな子 (国際性)

【学校行事】

(1) 交流学習会

小学部の各学年、中学部1年生でそれぞれが年に1回、タイの学校と交流学習会を実施。

・文化交流

・スポーツレクリエーション交流



## (2) 校外学習

タイの自然や文化に触れ、現地理解を深める。

- ・サファリワールド（小1）
- ・ドウシット動物園（小2）
- ・マックスバリュ（小3）
- ・バンケン浄水場（小4）
- ・チャーム臨海学校（小5）
- ・チェンマイ修学旅行（小6）
- ・アユタヤ日本村（中1）
- ・シンガポール修学旅行（中2） 他



### 【確かな力を育てる教育活動】

音楽科・・・全学年で専科教員が指導  
図画工作科・小4以上で専科教員が指導  
家庭科・・・全学年（小5以上）で専科教員が指導  
教科担任制・小6より一部教科で導入

### 【基礎的・基本的な力の定着】

学習習慣の定着・・・学び方を学ぶ指導  
家庭学習の課題設定（宿題）

あいさつ運動・・・学校全体で毎日実施

### 【土曜登校日】

年間で、9回程度を予定

（1学期2回、2学期6回、3学期1回）

### 【日本人学校ならではの教育活動】

#### (1) ことばの時間

小学部で朝学習の時間に実施

#### (2) 水泳指導

全学年で1年を通して実施

#### (3) 生活科、総合的な学習の時間

タイの歴史や自然、文化についての学習

#### (4) タイ語

全学年で週1時間実施

#### (5) 英会話

小3～6で、週2時間実施

小1・2、中学部で、週1時間実施

#### (6) IT教育

多様な場面、各授業においてIT機器とITルーム4

教室を使用

#### (7) キャリア教育

小中学部ともにゆめ集会を実施

中学部では進路啓発講演会や職場体験学習を実施

#### (8) 学校説明会

日本や海外の中高校関係者が来校

学校によっては入試も本校で実施

## 7 一日の学校生活

### 【基本時程】

登校 7：00～8：00

第1校時・第2校時

中休み

第3校時・第4校時

昼食・休憩・清掃

第5校時授業日バス発車 14：40

第6校時授業日バス発車 15：50

※一単位時間は中学部50分、小学部45分

## 8 バンコク日本人学校の危機管理

ゲートの警備と入校者・退校児童生徒のチェック

- ・保護者・・・受付警備員に、顔写真入保護者証を提示  
※保護者証は入学・編入学受付の時に作成
- ・保護者以外・予約をして、許可されたもののみ入校可能。  
当日は顔写真入の証明書を預け、VISITORカードを受け取って入校する。  
※校内では保護者証やVISITORカードを見える位置につける。
- ・児童生徒と同伴下校の場合  
職員室で同伴下校許可証を受け取った上で下校
- ・緊急時の対応・・・臨時休校、一斉下校、学校待機など  
※学校には非常食や飲料水を用意
- ・家庭への連絡・・・SMSメールや電話連絡  
※デモ、洪水等による臨時休校、緊急下校等への素早い対応

## 9 終わりに

バンコク日本人学校での経験をもとに、グローバルな視点を持ち、広く国際社会に貢献する資質・能力・態度の育成を目指す教育活動を今後も模索していきたい。

## 研究領域（V）教育課題

### 第11分科会 社会形成能力

#### 研究課題 社会形成能力を育む教育の推進

#### 視点

### ② 豊かな未来の実現に貢献する力を育むキャリア教育・プログラミング教育の推進

提案者 深谷市立岡部小学校長 強 瀬 哲 朗

## 1 はじめに

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、成人して社会で活躍する頃は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で一人一人が持続可能な社会の担い手として、社会の形成に積極的に参画し、社会のより良き構成員となることが期待されている。

そのような中で、学校教育が求められていることは、夢や志をもち、自分の力で道を切り拓く力を育成することであると考える。

## 2 本校の概要

本校は、深谷市の西部に位置し、JR高崎線岡部駅を学区にもち、開校以来140年を越える歴史と伝統のある学校である。国道17号や17号のバイパス、上越新幹線も東西に学区を横切り、学区の北部は水田が広がり、中央から南部は、夏は、特産のトウモロコシ、冬はブロッコリーの畑が広がる自然豊かな環境である。

現在児童数377名、1年生から6年生まで、2学級並行の12学級、特別支援学級が3学級あり、15学級の学校である。昨年度より通級指導教室が設置され、周辺の学校の児童も保護者に送迎されて通ってきている。

学校教育目標『正しく 豊かに』を具現化するために、「元気と笑顔 よいこといっぱい 岡小愛」を合い言葉に、渋沢栄一翁の生誕の地として、また、埼玉県初のオリンピック選手 野口源三郎先生の母校として、「ふるさと教育（キャリア教育を含む）」を行い、児童と教職員が一体となって、保護者や地域と連携し合いながら教育活動を推進している。

## 3 学校経営におけるふるさと教育の位置づけ

深谷市出身の偉人を基軸にふるさとを愛し、ふるさとを誇りに思う教育を深谷市全体としても取り組み、本校としても、同様に推進しながら、以下の経営方針を立て、本校独自の特色を生かしながら教育活動に位置づけて行っている。

○歴史と伝統を受け継ぎながら、新しい気風を吹き込み、全教職員が一丸となった積極的な経営参画で学校教育目標の具現化を推進する。

○学校・家庭・地域が一体となり、双方向の交流、連携

をする中で、安全・安心な学校づくりを推進する。

○岡部中学校区（こすもす学園）5校の連携を一層深め、小・中学校9年間の学びや育ちの連続性を重視し、立志と忠恕の深谷教育を推進する。

そして、「未来描いて ～土に根を張り 伸びゆく力～」として「ふるさと おかべプラン」を作成し、実践している。

## 4 「おかべプラン」を推進していくための課題

将来、ふるさとにそのまま残り地域の中で生活していくにしても、また、深谷市を離れ、国内外で生活するにしても、やはり、自分の国や生まれ育った市町の歴史や文化を理解し、ふるさとに誇りをもつことが、これからの社会を生きぬく力となると考える。

地域の歴史や文化を子どもに伝えるためには、まず、自分たちの生まれ育った地域はどんなところかという地域素材を洗い出し、見直すことが必要である。また、若手とベテランの2極化が課題となっている教職員の年齢構成もあるため、改めて地域の歴史や文化、その場所の特色を再確認し理解し、子どもたちに伝えていくことが大切である。さらに、自ら主体的に関わり、追究していけるような学習過程を工夫していくことも取り組みたい課題である。

## 5 課題解決に向けた本校の取組

### （1）深谷市や岡部中学校区での取組

#### ① 1/2成人式（4年生）

深谷市では、郷土の偉人渋沢栄一翁の心を受け継ぎ、『立志と忠恕の深谷教育～ふるさとを愛し、夢をもち志高く生きる～』教育を推進している。また、本校は岡部中学校へ進学する児童がほとんどであり、岡部中学校区を『こすもす学園』として小学校4校（岡部小学校・榛沢小学校・本郷小学校・岡部西小学校）と岡部中学校の5校で小中一貫教育を推進している。

本校の4年生では、3学期の参観日に合わせて、児童一人一人がそれまでの総合的な学習や社会科等で学んできたことをもとに、自分の将来の夢をみつけ、その夢の実現に向けて取り組み、努力していくことを発表する1/2成人式を行う。参観した保護者からも好評をいただいている。

#### ② 中学校体験入学（5年生）

また、今年度から、こすもす学園4校の5年生を対象に、3学期、岡部中学校への体験入学を計画している。市内でも4つの小学校が1つの中学校へ進学する地区は他にはなく、中学校での授業や生活について体験することで、進学

後の人間関係や中学校での新しい環境へ少しでもギャップを減らすことをねらいとして、実施する予定である。

### ③ 中学校説明会参加（6年生）

6年生は、より具体的な授業の様子や部活動の見学を行い、情報収集を行う。また、岡部中学校では、『無言膝つき清掃』に取り組んでおり、実際に一緒に体験する。本校でも4年生以上から同様に『無言膝つき清掃』を取り入れている。

## （2）総合的な学習と道徳科、社会科

### ① 「ふるさと先生」道徳科（6年生）

これも、深谷市全体で行われているもので、道徳の時間に、「ふるさと先生」と呼ばれる講師の方を招いて、『渋沢栄一翁』関連の資料を使い、伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度の育成を目的として授業を行っている。

また、1年生から6年生まで、「深谷こころざし読本」にある、渋沢栄一翁、尾高惇忠先生、葦塚直次郎先生（深谷の3偉人）関連の資料を活用しての学習を行っている。

### ② 地域の偉人にふれる（3・4・6年生）

3年生では、総合的な学習の時間『岡部の自慢 大発見！』において、野口源三郎先生や岡部駅、トウモロコシやブロッコリー畑、源勝院や普濟寺の神社仏閣をテーマに学習活動を展開する。

4年生では、社会科の地域学習において、富岡製糸場や市内にある渋沢栄一翁関連の施設を見学する。

6年生では、社会科の歴史学習と総合的な学習をリンクさせて、地域にのこる古墳、中宿遺跡（校倉造りの倉庫）、岡部六弥太（鎌倉時代）墓碑の調査や、江戸時代の中山道（17号国道）、大正から昭和にかけて、埼玉県初のオリンピック選手である野口源三郎先生について取り上げ、子どもたちが、主体的に選択し、資料を集め、調べて行く学習活動を展開している。

### ③ プログラミング教育（特別支援学級）

4年生を対象に学習が進められていて、コンピュータのかんたんソフトを使ってキャラクターを画面上で動かす操作を組んでみるような授業が始まっている。また、特別支援学級（知的障害）でも、芋虫のキャラクターに前後左右の命令カードを読み込ませ、地図上を動かすという授業も実施したが、単発的なもので、計画的に整備を進める必要がある。

## （3）地域の人やものと触れあう体験活動

### ① トウモロコシ皮むき体験（1年生）

食育と関連させて、1年生がトウモロコシの皮をむき、それを、自校の給食調理場でゆでたものをその日の給食とするようなことを行っている。自校給食であるがゆえにできる取組となっている。

### ② 田植え、稲刈り体験（5年生）

6月末に地域の方からお借りした田んぼを使って、『岡

部地区自然を愛する会』『岡部地区ロータリークラブ』の皆さんのご協力により、田植え体験を行った。今年は、子どもの保護者にも参加を呼びかけ、親子で体験するような工夫を行った。その際、水辺の水生生物の学習として、「ざりがに」「ほたるの幼虫・成虫」「カブトエビ」など普段ではあまりみられない生物についても実物を見せてもらっている。秋の稲刈りの際も、稲を刈り取るだけでなく、昔の農機具体験として「だっこくき」や「せんばこき」をその場に用意し、体験を行うことができる。

### ③ 野菜栽培体験（全学年）

校地のとなりに畑を借りており、「畑の先生」として、農家をしている保護者の方にお世話になり、特産のトウモロコシ、大根、ジャガイモ、サツマイモ等全校児童が関わって栽培体験を行っている。ただ、教室で教師の話の聞いているだけではなく、実際の体験や活動を通して、学んでいくことで、より自主性や主体性を身につけることができると考える。

## （4）その他

### ① 校長室での暗唱

毎月の暗唱として、渋沢栄一翁が幼少期に尾高惇忠先生に論語を学んだことにちなんで、代表的で、小学生にも比較的理解しやすいものを論語の中から選んで取り入れている。また、埼玉郷土かるたの読み札の暗唱も課題として行った。県内各地の偉人や特産物等ほとんど網羅されており、郷土を知るものとしては非常によいと考えている。昨年度は各学年90%以上の合格率であった。

### ② 読書月間 伝記10冊に挑戦

6月にあじさいがきれいに咲くことや、秋に紅葉したもみじがきれいなことに合わせて、積極的に読書を推進する『あじさい読書月間』と『もみじ読書月間』を設けている。6月は、ビンゴゲームの要領で、様々なジャンルの本を読むことを推奨した。秋には、図書室の伝記コーナーにある本の種類や冊数を充実させ、高学年を対象に伝記10冊読破に挑戦をさせていきたいと考えている。

## 6 まとめ

今後への課題として、それぞれの取組がまだ、ばらばらであり、系統性や計画性など繋がりが十分練られていないところがあるので、ねらいを明確にして、プランの充実を図る必要がある。また、本校の児童の実態に合わせた勤労観や職業観をさらに明確にして、一人一人の取組状況について年度をまたいで、ポートフォリオのように継続して積み上げていけるようなキャリアパスポートを作成するなど、全教職員で共通理解を図り、組織的に進めて学校力をアップしていかなければならない。さらに、今後一層、保護者や地域の方々の協力を充実する働きかけを校長がリーダーシップを発揮し行っていきたい。

## 研究領域（V） 教育課題

### 第12分科会 自立と共生

#### 研究課題 自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進

#### 視点

### ① 子どもの自立を図る特別支援教育の推進

提案者 伊奈町立南小学校長 小口 雅 雄

## 1 はじめに

現在、障害の有無にかかわらず、人々が互いに人格と個性を尊重し合う社会の実現が求められている。

子供一人一人の教育的ニーズに一層きめ細かく応えるインクルーシブな学校づくりのためには、自立と社会参加を見据えて、その時々々のニーズに応じた効果的な指導や支援ができるよう、小中学校における通常の学級や特別支援学級、通級による指導や特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を柔軟に活用しながら取り組んでいく必要がある。また、「合理的配慮」の観点から、教職員の指導力の向上やユニバーサルデザインの視点を踏まえた授業づくりの推進を図ることも重要である。

こうした教育環境整備を推進するには、教職員一人一人が自分の役割を発揮し、子供の自立を支援できるような校内体制を構築するとともに、関係機関との結び付きを緊密にしていかなければならない。

## 2 本校の概要

本校は、町の南側にあり、JR 蓮田駅が最寄りの駅となる。学校の周辺から東側は住宅が密集しているが、西側は、自然に恵まれた環境を有している。昭和54年に開校し、今年で41年目を迎える。児童数は518名、学級数は18学級であり、うち特別支援学級が2学級ある。

保護者や地域住民は協力的で、校庭の芝生の管理にも多くの支援をいただいている。また、「下校見守り隊」というボランティアの方々が、毎日、校門から児童の下校付き添いをしてくださっている。

## 3 研究のねらいと課題

伊奈町では、「学んでひろげる伊奈の教育『人は 人によりて 人となる』」を基本理念として、重点施策の1つに「特別支援教育の充実」を掲げている。それをもとに各校、「多様な学びの場における環境整備」「共生社会の形成を目指した教育の推進」「一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育の推進」への取組を図っている。しかし、何らかの



ことや、保護者の特別支援教育を特別視する現実、固定化されがちな指導体制は、教育的ニーズに合った取組になっているとは言いがたい。

## 4 研究の概要

### (1) インクルーシブ教育システムの構築

#### ① 学校経営方針への明確な位置づけ

伊奈町教育行政重点施策の指針に基づき、学校経営方針に「自立と共生」を位置づけるとともに、「校長室だより」等で、教職員への日常的な啓発を進める。

#### ② 個別の教育的ニーズの収集と把握

就学前から、早期に幼稚園や保育園の児童に関する情報収集と行動観察による情報共有を図り、ニーズのある保護者との就学相談を行う。これをもとに、UD化や合理的配慮等に向けた整備を進める。

#### ③ 福祉・医療等、関係機関との連携

伊奈町就学支援委員会を中心に、病院や特別支援学校、障害児通園施設や伊奈町子育て支援課等との連携や情報共有を行い、必要に応じた支援や指導体制づくりを進める。

### (2) 校内支援体制の強化

#### ① 校内就学支援委員会の開催

児童一人一人の実態把握を行い、特別な配慮を必要とするか判断するとともに、特別な教育的支援を必要とする児童の支援体制づくりの検討を行う。その際、個別の指導計画や教育支援計画を作成して、就学支援・就学相談などについても検討する。

#### ② ケース会議の開催

校内コーディネーターを中心に、各学級の気になる児童について、全教職員の共通理解・行動連携を進める。児童を支援することへの意識を高めるとともに、継続してケース会議を実施していくことで、校内支援を支える教職員の育成にもつなげる。

#### ③ 特別支援教育の研修の実施

- ・外部講師（特別支援学校）等を招き、特別支援教育の目指す方向性等に関する理論研修の実施
- ・個別の指導計画や教育支援計画の作成とそれに基づく専門性と対応力を高める実践研修（県立総合教育センター・要請研修）の実施

#### ④ 通級指導教室の支援

伊奈町には、通級指導教室が、小中学校それぞれ1教室設置されており、本校からも4名の児童が通っている。児童の能力や特性に応じて、ソーシャルスキルトレーニング等に取り組んでいる。学期ごとに、通級指導教室の担当者が来校し、当該児童の行動観察をするとともに、担任と面談を行い、支援に関する情報共有を図る。

#### ⑤保護者との教育相談（信頼関係の構築）

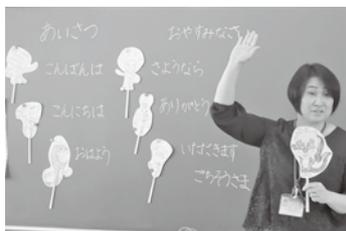
- ・保護者の負担は非常に大きいことを理解し、気持ちを受け止めるようにする。また、児童の様子は事実を肯定的な表現で伝え、互いにより対応を探る。
- ・家庭の教育力を見極め、家庭での対応について具体的な目標を絞り、保護者と一緒に評価する。
- ・保護者に対して専門機関への受診を焦らず、ステップを踏みながら、学校でできる支援、家庭でできる支援を行っていく。その際、教職員自身が専門機関の相談や助言を受けながら保護者との連携を図る。

### (3) 授業のユニバーサルデザイン化

学校生活の大半を占める授業の役割は特に大きい。児童が「わからない」「できない」ことを積み重ねると、自信をなくし、自尊心が低下し、やる気と笑顔を奪い、人間関係にも歪みが生じる。誰もが「わかる」「できる」授業を目指した授業のユニバーサルデザイン化は重要な役割を担っている。

#### ①学習環境の整備（場所の構造化）

- ・黒板と黒板周りはスッキリ
- ・整理されカテゴリー化された環境



#### ②授業構成の工夫（活動の構造化）

- ・めあての明確化、見通しの明示、全員が活動できる場づくり（ペアやグループ）
- ・学習の流れのパターン化、説明する時間の短縮、活動時間の確保

#### ③情報伝達の工夫

- ・指示・説明・発問（具体的に簡潔にわかりやすく、可視化、肯定的な表現、場面に応じた声の使い方、ICTの活用）
- ・非言語指示（OKサイン、ヘルプカード）

#### ④板書・ワークシート

- ・整理された板書、時間内に書き終わられるノート、補助プリントやワークシート

### (4) 特別支援学級（きらきら学級）の取組

#### ①教科における交流及び共同学習

交流及び共同学習は、障害のある児童の社会参加を促進するとともに、障害のない児童にとっても社会を構成する様々な方々と共に助け合い、支え合って生きていくことを学ぶ機会となる。

- ・学年や交流学級の教科、行事等に参加
- ・興味や関心のある単元を交流学級で学習
- ・縦割り班活動、交流学級の給食等に参加

#### ②学校間交流

- ・特別支援学級7校交流会（年間2回）
- ・伊奈町文化祭への合同作品展
- ・4小学校及び地区別の小中学校合同校外学習



#### (5) 外部機関との連携

児童の状況に合った専門的な支援が受けられる病院等の医療機関、教育センターや療育センター、人間総合科学大学等の相談機関、児童相談所等の福祉機関などの特性を生かし、個に応じた支援についての助言をいただく。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等も活用することで、多角的・専門的な視点で支援をしていくことが可能になる。

#### (6) 保護者への啓発

- ①校内コーディネーター等が保護者との連絡調整をスムーズに行うためにも、保護者会等で、特別な配慮を必要とする児童への支援方針を説明し、保護者の理解を得るようにする。
- ②PTA家庭教育学級で、子供への関わり方について理解を深める。
  - ・家庭教育アドバイザーによる講座「障がいを身近な問題としてとらえるための保護者の役割」の開催
- ③自立活動で作った作品をPTAバザーで販売したり、太鼓の演奏を公開する場を設けたりして、特別支援学級の児童の頑張りをアピールする。

### 5 まとめ

児童一人一人が生き生きと充実した学校生活を送ることができるよう、校長として、特別支援教育や障害に関する認識を深めるとともに、「インクルーシブな学校づくり」の推進に、リーダーシップを発揮していくことが求められる。そこで、児童の自立と社会参加（共生）を進めるために、組織として十分に機能するよう教職員の専門性の向上と体制の整備等の強化充実に鋭意努力していく。



## 研究領域（V）教育課題

### 第12分科会 自立と共生

#### 研究課題 自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進

#### 視点

### ② 心結ぶ未来社会の実現と持続可能な社会の担い手を育む環境教育等の推進

提案者 行田市立星宮小学校長 芙蓉 良 明

## 1 はじめに

地球温暖化による異常気象や自然災害、自然破壊など地球環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっている。豊かな自然環境を守り、子孫に引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負荷が少なく持続可能な社会を構築することが大切である。

また、新学習指導要領の総則においても、「環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人の育成」が求められている。

## 2 本校の概要

本校は、行田市の北西に位置し、田園風景の中にたたずむ開校134年の歴史ある学校である。児童数66名、学級数6学級の小規模校である。校舎北側には、100メートルのコースがゆったりと確保できる校庭があり、南側には子供達が遊べる緑地も広がっている。このような豊かな自然環境の中で、子供達は伸びやかに学び、活動している。

令和元年度、本校は次に挙げる学校教育目標等を具現化すべく教育活動に取り組んでいる。

### 「学校教育目標」

・考える子 ・なかのよい子 ・きたえる子 ・はたらく子

### 「環境教育重点目標」

- ・自然環境や環境問題に対する感受性の育成
- ・環境問題に関する責任と人間活動の在り方についての認識
- ・よりよい環境の創造に積極的に参加する意欲の育成

教育活動を進めるにあたっては、子供一人一人の人権を尊重し、家庭・地域社会と連携して人間としての基礎・基本を着実に身につけるよう努めている。また、課題意識をもち迅速に改善にあたり、教職員が使命感と責任感をもち協働している。

本校はPTA活動も盛んで、子供達の健全育成に主体的に活動している。あいさつ運動や通学路の安全対策の面でも御協力いただき、地域の宝として、皆で子供達を見守り慈しみ、育てている。

## 3 環境教育のねらいと方法

環境教育のねらいは、持続可能な社会づくりに貢献する人材の育成である。持続可能な社会は、環境だけでなく、社会的公正や経済など幅広い領域と関係することから「持続可能な開発のための教育」ととらえ、多分野の教育を積

極的に結びつけて取り組む必要がある。

学校における環境教育では、発達の段階に応じたねらいを設定することが大切である。(図-1)

小学校低学年では、体験や感性が重要であり、学年が上がるに従い、課題発見と解決の実践力、行動を通じた思考・判断能力と、重点となるねらいが変化する。また、環境教育では、課題を発見し、取り組み、結果をふりかえる一連の過程を経て、さまざまな能力が身につくよう設計することが重要である。



図-1

環境教育には、学校全体で取り組むことが不可欠である。各学校の目標、目指す児童像を踏まえたうえで、全教職員が環境教育にどのように取り組み、実践するかについて共通理解しておく必要がある。また、学年間・教科間での連携を積極的に図ることにより、環境教育の効果はより高められると期待されている。特に児童にとっては、地域の身近な問題に目を向けた内容を取り上げ、身近な活動から学習を始めることが有効である。(図-2)

また、環境保全のための取り組みは、日常生活の中でも意識的に行っていくことが求められている。家庭や地域社会と積極的に連携し、学校で学んだことを家庭や地域社会での生活に生かすことができるよう配慮することが必要である。

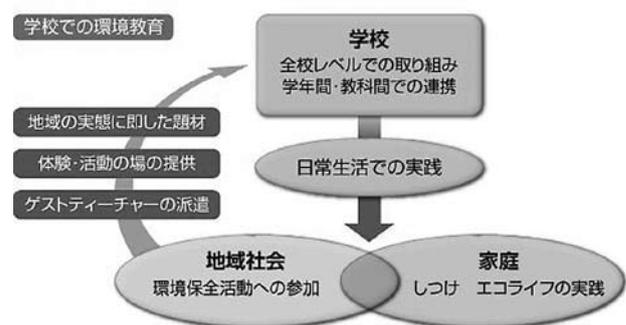


図-2

#### 4 本校の取り組み

本校では、これまでこの豊かな自然環境を生かし、学校応援団やPTAと連携して、環境教育に取り組んできた。本校の取組について紹介する。

##### (1) 環境教育の基本計画を策定する。

環境教育推進委員会（教務主任，理科主任，環境教育主任，総合的な学習の時間主任，生活科主任）による推進体制を整備し，環境教育の目標，方針，全体計画，活動計画を立案させ，職員会議で提案，共通理解を図って取り組んでいる。

##### (2) 環境教育を積極的に教育課程に位置付ける。

教育課程編成の方針を明確にし，日課表に活動を位置付けるとともに，各教科指導，道徳教育，特別活動，教育活動全般において，環境教育年間指導計画を作成している。

国語では，環境教育の視点を踏まえた教材から，人間，社会，自然などについての考えを深め，環境との関わりについて関心を高めるとともにコミュニケーション能力を育てることをねらいとして，3年生では，音読発表会「キツツキの商売」，5年生では，「本は友達」緑の木陰で読書をしよう，全学年では，「星宮の自然見つけたよ」俳句・川柳の学習を行っている。

社会では，生活と環境保全の学習を通して環境破壊の事実や資源の有効利用文化の見直し，国際理解との関わりへの関心を高めよりよい環境を創り出す能力や態度を育てることをねらいとして，3年生では，「学校のまわりのようす」，4年生では，「住みよいくらし」，5年生では，「米作りのさかんな庄内平野」の学習を行っている。道徳教育では，自然や動植物への愛護，生命に対する畏敬の念を育てるとともに，物を大切に，思いやりを持って環境保全やよりよい環境作りに主体的に関わることのできる心情や実践的態度を育てている。

特別活動では，栽培計画をもとに，年間を見通した栽培活動を実践することや思いやりの心と積極的に植物に働きかける主体性を養うことをねらいとして，1年生では，アサガオの栽培，種の収穫，アサガオの種のプレゼント作り，2年生では，ミニトマトの栽培，1・2年生では，さつまいもの栽培，収穫，調理，チューリップの栽培，3年生では，ヒマワリ，綿，ピーマンの栽培，4年生では，ヘチマの栽培，収穫，たわし作り，小麦作り，うどん作り，5年生では，田植え，稲刈り，おにぎり作り，ジャガイモの種芋植え，6年生では，ジャガイモの収穫，調理，全学年では，パンジーの栽培を行っている。

委員会活動では，飼育栽培委員会がウサギの世話や「ふれあい花壇」の手入れを常時活動として実践している。環境教育の推進的な立場であることを自覚できるように，児童の創意工夫を生かして自主的な活動をさせている。

児童に主体的に関わっていくことの大切さに気づかせ，夢と希望を与える活動をめざしている。また，メダカや昆虫の飼育も積極的に行っている。

その他の活動として，集会活動では，「グリーン&ネイチャー集会」，「木と仲良くなろう集会」として造園業を営む方にお話をいただいた。児童会活動では，星の子まつりを児童会が中心となって，学年単位に催し物の企画・運営を行っている。学年の催し物では，栽培活動を生かしたり，校内の自然を生かしたりした企画を毎年伝統的に行っている。また，ペットボトルキャップ回収運動，緑の羽根募金など全児童の環境に対する関心を高めている。さらに，環境掲示コーナーの設置，環境の日（除草作業），牛乳パック回収運動，「ぼくの木，わたしの木」，縦割り清掃活動などを行っている。

##### (3) 学校応援団・PTAとの連携。

様々な農業体験では，学校応援団の方に指導を行っていただいている。PTAや地域の方には，アルミ缶の回収（通年），資源回収（年3回），校地内環境整備活動（年1回）を行っていただいている。2，5年生の児童，保護者にはエコライフにご協力いただいている。

#### 5 まとめ

環境教育を通して，子供たちが樹木や草花だけでなく，学校や地域の自然環境について，今まで以上に興味，関心を持てるようになった。教職員も樹木や草花，野菜などの栽培活動について研鑽を積むことができた。また，環境教育についての研修が深められた。本校が保護者，学校応援団をはじめとする地域の方々に支えられ愛され守り育てられているということを再認識できた。

豊富な自然環境を維持していくためには，着実な活動を計画的に進めることが大切である。自然や環境を守り，よりよいものにしていくために児童一人一人の感性をさらに磨き育てていきたい。

参考引用文献 環境省 「授業に活かす環境教育」

## 研究領域（V） 教育課程

### 第13分科会 連携・接続

#### 研究課題 家庭・地域等との連携と異校種間の接続の推進

#### 視点

### ① 家庭・地域等と連携した開かれた学校づくりの推進（コミュニティスクール・体験活動など）

提案者 加須市立水深小学校長 三田秀典

## 1 はじめに

子供たちを取り巻く環境や学校が抱える課題は複雑化・多様化しており、教育改革・地方創生の動向からも、学校と地域の連携・協働の重要性が改めて指摘されている。もちろん、子供の健やかな成長・発達にとって、学校・家庭・地域のそれぞれが役割をしっかりと果たし、三者が連携・協働をしていくことは学校の普遍的課題でもある。そのような中で、学校が中核的な役割を果たしていくためには、学校が家庭や地域に対し積極的に関わり、様々な状況やニーズを的確に捉え、さらに家庭や地域の支援を受け入れ、学校経営に反映させていく必要がある。

また、学校だけでなく家庭や地域も時代に応じて変化していくことが想定される。これまで積み上げてきた連携・協働を継続するだけでなく、新たな連携・協働の方法を模索していくことがこれからの学校経営に必要であると考えられる。

## 2 本校の概要

本校は大正2年に開校し、107年目を迎える伝統校である。学区内には田畑が広がり、近郊農村型で米やイチゴ、キュウリ等の栽培が盛んな地域である。しかし、平成18年頃から農地を宅地に転用する動きが加速し、大規模な宅地開発が現在に至るまで継続的に進められている。それに伴い児童数も急増してきた。平成18年度に児童数200名、学級数7学級であったものが、平成30年度には児童数628名、学級数21学級と児童数・学級数ともに12年間で約3倍となり、現在では市内で児童数が最も多い学校となっている。

以上のような状況から、他の地域から転入してきた家庭が急増している学校ではあるが、保護者や地域が学校に協力的で積極的に支援をする地域であるということには変わりがない。今後もこの関係性を継続していきたい。そこで本校では、目指す学校像を「大きな夢を育てる 地域の学校 水深小学校」とし、学校・家庭・地域が一体となった地域密着型教育を推進している。

## 3 本校の取組

### (1) 家庭・地域との連携

#### ① 学校いきいきステーション（学校応援団活動）

加須市では全県に先駆けて、平成17年度から「学校

いきいきステーション事業」を導入した。本校においても当時から、ふれあい推進長を中心に学校応援団を組織して、現在においても活発に活動している。学校応援団には、子供の登下校を見守る「安心・安全応援団」、子供の学習活動を支援する「学習支援応援団」がある。学習支援応援団では、水深地域ならではの「うどんづくり体験（総合）」や「いがまんじゅうづくり体験（総合）」、その人ならではの「のこぎりの使い方指導（図工）」、「裁縫指導（家庭科）」など特色ある学習支援活動を年間15回程度、全学年にわたり指導計画に位置づけて実施している。応援団の皆さんも、その取組を楽しみにしてくれている。そして、活動後には振り返りを行い、児童や学校にとって、よりよい形での活動となるよう検討を重ねてくれている。

#### ② 学校連絡協議会

地域の意見を学校経営に反映させ、教育の質の向上と地域ぐるみで子供をよりよく成長させることを目的に年間3回実施している。地域の代表者と学校側が学校の教育方針や教育活動について協議したり、地域の取組や地域での子供たちの様子について情報共有したりしている。協議会で出された意見は、学校経営方針を見直す際の貴重な意見として反映させている。

○参加者：学校評議員、後援会長、PTA会長、ふれあい推進長、民生・児童委員、交通指導員、校長、教頭、主幹教諭（25名）

○協議題：学校経営方針や指導の重点について

地域と協働する授業や学校行事について  
登下校時や下校後の子供のようすについて  
学校評価と学校に期待することについて 等

#### ③ 自治会等との連携

水深地域は10の自治会で構成され、それぞれに区長がおり地域活動の中心として活動している。学校と区長会との関係が強く、学校行事、地域行事を進める際には、相互に連携し合い協力体制をつくってきた。

各地区で開催される祭りの時には、多くの自治会から本校の太鼓クラブに出演依頼がある。この太鼓クラブは、13年前に学校のクラブ活動の一つとして発足した。発足時から地域の水深太鼓保存会に指導にあたってもらっている。現在では、発足時に太鼓クラブに所属していた子供たちが社会人となり保存会に戻り、地域の活動を

支え始めている。これは学校において、子供を地域の保存会が教え、自治会が育ててきた活動によって生みだされた新しい地域づくりの姿だと地域の方は喜んでいる。

このような活動を進めていくことは、学校が教育活動を通して地域づくりに貢献することになり、地域の信頼を得ることにつながると思う。

#### ④ 親児の会との連携

子供たちが喜ぶ活動することを目的に結成された保護者有志の会であり、現在30名程の会員で活動している。

定期の活動としては、毎年11月のいっちゃんデー(学校公開日)に全児童分の焼きそばパンを手作りし、子どもたちにプレゼントしている。また、臨時の活動として、年間3回程度、教員では対応することが難しい重機や専門工具を活用した環境整備(高木の枝打ち、体育施設のペンキ塗り、リヤカーの修理等)や教材作成(縄跳び練習板)に取り組んでいただいている。

親児の会の活動の際には、教職員も有志で参加し一緒に活動をしている。親児の会の会員は父親が多いため、普段話すことの少ない父親と教員がたくさん話をする機会にもなり、教員と保護者の信頼関係をつくるよい契機にもなっている。

### (2) 他校種との連携

#### ① 幼稚園との連携

本校は敷地内に公立幼稚園を有し、校長が園長を兼務しているという特色をもっている。そのため年間を通して、日常的に園児と児童が関わる活動を設定している。指導の重点なども小学校と幼稚園で一貫性のあるものとしている。また、教員が相互に関わり、子供の様子や効果的な関わり方等について情報交換している。

#### ② 保育園との連携

年間3回程度、第四保育所の子供たちが1年生の教室を訪問し、一緒に工作をしたり歌を歌ったりする活動を通して、翌年度に入学した時の子供同士の関係づくりに役立てている。

#### ③ 中学校との連携

- ・小学校における小中合同あいさつ運動の実施(年3回)
- ・中学校の教員による出前授業の実施
- ・小中連絡協議会の実施
- ・中学生の職場体験事業の受け入れ

#### ④ 高等学校や大学との連携

- ・花咲徳栄高校食物科の生徒に料理を教わろう(総合)
- ・花咲徳栄高校陸上部の生徒に走り方を教わろう(体育)
- ・平成国際大学駅伝部と競走しよう(持久走大会)

### (3) 新たな連携 中学校区リンクミーティングの実施

現在、全国的にコミュニティスクールを実施する学校

が増えている。地域と学校の関わり方を見直し、新たな連携を進める1つの方法である。しかし、学校運営協議会等の内容や手法、効果等多くの部分が、これまで加須市内の各学校が展開してきた学校いきいきステーション事業や学校連絡協議会等と重なる。そこで加須市においては、これまでの取組みをコミュニティスクールに移行させるよりも、これまでの優れた連携を保持しつつ、学校と地域の新たな連携の在り方を展開していくこととし、「加須市保・幼・小中一貫事業」をスタートさせた。その中で新たな地域連携の枠組みとするのが「中学校区」である。

#### <目的>

中学校区の保育所、幼稚園、小学校、中学校が、目指す子供像を共有し、幼児教育、義務教育における学びの連続性を意識した一貫性のある教育を目指す。また、保育指導、学習指導、生徒指導、校種間の交流及び家庭・地域との連携等を通して、滑らかな接続を図る。

#### <方法>

中学校区内の保育所、幼稚園、小学校、中学校の校長と職員の代表、そして各校の学校評議員の代表が集まり、以下の事項について協議する。(中学校区リンクミーティング)

#### (協議内容)

- ・中学校区における目指す子供像
- ・中学校区の特色を生かす重点目標
- ・学びの連続性を意識した一貫性のある教育

#### <実践内容>

- ・学びの連続性を意識した保育指導、学習指導の工夫・改善
- ・組織的な生徒指導等の工夫・改善
- ・幼児、児童生徒の交流活動
- ・教職員の交流研修
- ・学校、家庭、地域との連携を図る取組み

## 4 おわりに

学校が時代と共に変化していくように、地域や家庭も変化していくものである。しかし子供のよりよい成長のために、三者の連携・協働が不可欠であることは変わらない。そこで、これまでの連携を見直し、保持継続していくことと改善すべきことを見極めていくことが必要である。本校においても家庭・地域との連携を見直し・改善すると共に、中学校区リンクミーティングのように新たな連携・協働に積極的に取り組んでいきたい。

## 研究領域（V） 教育課題

### 第13分科会 連携・接続

#### 研究課題 家庭・地域等との連携と異校種間の接続の推進

##### 視点

#### ② 異校種間の学びの連続性を重視した取組の推進（小中一貫・保幼小連携など）

提案者 本庄市立仁手小学校長 岡 芹 純 一

### 1 はじめに

新学習指導要領が目指す、変化の激しい社会で生きるための子供に必要な資質・能力を明確にし、教科を学ぶ意義や社会のつながりを重視した教育課程編成は重要な課題であるとする。特に、保育園や幼稚園と小学校、小学校と中学校など、異校種の学校等との円滑な接続を図るとともに、各校種等で育成すべき資質・能力を明確にし発達の段階や学びの連続性を重視し、各学校の特色を生かした異校種間の連携の取組を充実させることが大変重要であるとする。

### 2 本校の概要

本校は、今年で開校133年の歴史と伝統があり、児童、保護者、地域の住民、教職員が愛着と誇りを持つ学校であり、地域からの興味関心と協力体制は非常に高い。令和元年度の児童数は59名で、学級数は通常学級のみの6クラスの小規模の小学校である。学校教育目標は「本気で自ら学ぶ子・心豊かな子・たくましい子」であり、目指す学校像は「学び・友だち・夢いっぱい一人一人が輝く学校」と掲げている。本校のよさは、小規模校ならではの「児童一人一人にきめ細かく接することができる」ところであり、「最後までがんばろう」を合言葉に、様々な体験活動を積極的に行い、多くの経験を積み、学習意欲と自信をつけさせている。

さて、本校の児童は学校近隣の保育園に入園、卒園する児童が多く、本年度在籍児童の59名のうち44名であり、約75%と実に多い。また入学後、低学年のうちには放課後、学童保育として、半数以上の児童が通っている。そのため、保育園と学校との結びつきは非常に深い。また、進学先は本庄市立公立中学校がほとんどであるが、市内に私立中学校が2校あり、毎年1～2名が進学している。

### 3 本校の取り組み

#### (1) 幼保小連携

就学予定園児との関わりについて紹介する。

##### ① 運動会への招待（9月末～10月初旬）

就学予定園児を運動会に招待し、徒競走及び玉入れの競技に参加してもらう、さらに昨年度は参加園児の年齢の枠を広げ、また玉入れについては本校在籍の1・2年生も一緒に参加し例年以上に盛り上がった。この活動は園児にこれから先の小学校生活に期待を抱かせることができたとする。

##### ② 学校公開日への参観呼びかけ（10月下旬）

本校で毎年実施している「学校公開」について、運動会時に就学予定園児の保護者に紹介し、積極的な参観を呼び掛けている。本校に兄弟が在籍している児童の兄弟を中心に参観に訪れている。

##### ③ 仁手っ子まつりへの招待（11月）



第1学年生活科の学習において、近隣保育園との交流を目的とし、小学校に園児をお客さんとして招待する。体育館にお祭りの屋台を模したお店を設置しゲームコーナーや手作りの作品をプレゼントするなど交流を深めることができる。本校児童の意欲の向上につながっている。

本校児童の意欲の向上につながっている。

##### ④ 就学時健康診断時における教育相談（11月中旬までに）

就学時健康診断の教育相談では、時間を確保し保護者に対し校医による健康面の診断結果やスクリーニング検査時の園児の様子を伝えるとともに、入学に関する不安や期待などを個別に丁寧に聞き取っている。時間的なゆとりがあるため、保護者の不安の軽減につながっている。

##### ⑤ 授業体験会の開催（2月）

本校就学予定園児の保育園や幼稚園に呼びかけ、1・2年生の教室での授業体験を行っている。当日はまず、



最初に、園児と児童の混合のグループを作り、児童が手をつないで校内を案内する。その後園児の人数分の机と椅子を準備し、教室の児童の隣に配置する。授業体験では、児童が教師の話の聞き方や手の上げ方座り方などの手本を見せ、その後簡単な操作活動（線を結ぶ、塗り絵など）を一緒に行う。特に授業体験では、園児は緊張しながらも楽しそうに参加している。児童にとっては先輩としての自覚が芽生え、成長の機会となっている。また、教員にとっては、指示や発問に対しての園児の様子を知る大変貴重な時間である。

##### ⑥ 幼保小情報連絡会（2月）

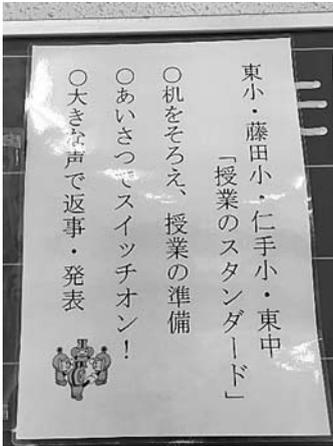
就学予定園児の保育園、幼稚園に訪問し、園の活動時

における園児の様子を見るとともに、様々な情報を得ている。

## (2) 校種間連携

公立中学校との連携について紹介する。

### ① 中学校区共通の「授業のスタンダード」



平成29年度に学びの連続性を重視した観点から、当時の管理職及び、学力向上担当者の協議により、学習のスタイルを中学校区で統一し、「4校の学習のスタンダード」として確定した。本校では毎年確認し、全教室に掲示し、定着と徹底を図っている。小学校からの取組を中学校でも継続して指導し効果が表れている。

### ② 小中連携シートを活用した情報交換会

※小中連携シート・・・教育委員会より示された様式をもとに小学校での児童の様子（出欠席や学習、生活面等）を個別のシートに小学校が作成し3月に中学校へ情報提供するもの。

令和元年度はシートに関連した情報交換が6月に中学校で行われ、前年度の担任が参加した。当日は授業を参観し小学校教員は中学校での状況を確認する。さらに中学校教員より入学後2か月の様子の説明や質問に答えるなどの情報交換を行っている。

### ③ 中学校授業研究会等への積極的な参加

本市では、教育委員会、北部教育事務所支援担当学校訪問の際、また校内授業研究会においても他校職員が参加可能な場合には、開催の案内等が全市内小中学校に紹介される。本校では前年度担任を中心に参加し、中学校での指導方法について参観するとともに、児童の様子についても確認し、研究協議会にも参加している。特に技能科の授業では、指導方法に参考になる部分が多く、得るものが大きい。

### ④ 中学生社会体験の受け入れ

毎年、本庄市が行っている社会体験事業で、中学生が本校に職業体験に来る。3日間、クラス担任の補助等を行う。体験期間中、小学校の先生の仕事内容や児童への



支援や指導、仕事のやりがいや苦労している点、どうして教師になりたかったのかなど、各担任と話すことによ

り、理解を深めている。また、体験の様子を身近に見ている児童にとっては、今後の中学校での学習に対する見通しと良い見本となっている。

### ⑤ 中学校区いじめ・非行防止ネットワーク会議

年間2回、生徒指導、教育相談の観点を中心に、中学校からの現状報告及び情報提供を受けるとともに、本校の現状について報告する。会議には、中学校区域の全小学校長、保護司や警察、市役所担当課職員等が参加し教育委員会より指導助言をいただく。この会議は、中学校区の現状を知り、各校の今後の方針等について確認できる会議となっている。

### ⑥ 中学校部活動交流会（野球部・陸上部・吹奏楽部）



中学生が小学校に来校し児童に走り方、投げ方、楽器の体験教室を開催している。本校では、全員が体験する。中学生からの指導は身近でとてもわかりやすく技術が向上するとともに、中学生の頼りになる様子は児童にとっても大変有意義な活動である。

### ⑦ 中学校より生徒によるあいさつ運動

中学生が小学校に朝訪問し、児童にあいさつ運動を行っている。元気にあいさつしてくれる中学生に、照れてしまう児童も中にはいるが、あいさつの良い見本として大変良い活動となっている。

### ⑧ 中学校生徒による清掃指導



中学校での伝統の一つである「無言ひざつき清掃」の方法を実際に中学生が来て小学生に指導してくれる。互いに雑巾を持ち、一緒に清掃することで、小学生の意欲も高まる。また、「自分たちも中学生になったら、このような清掃を行うのだ。」という気持ちにもなれる。本校では中学校での清掃の様子の写真の提供を依頼し、いただいた写真をもとに全校朝会で児童に紹介し指導した。この体験と学習は本校の清掃活動を劇的に向上させたり組みとなった。

## 4 まとめ

今回、取組をご紹介する際に、中学校から発信される取組が非常に多く、小学校が少ないことに改めて気付いた。今後は小学校発信の連携方法、内容を検討していきたい。また、近隣の高等学校との新たな連携を是非、実現したい。

今後とも、中学校や保育園等々との相互理解、協働の充実により、異校種間の学びの連続性を重視した教育活動を継続、発展させるため、校長として力を尽くしていきたい。